



Title	無助詞時間節構文の構文文法的考察
Author(s)	松浦, 幸祐
Citation	日本語・日本文化研究. 2021, 31, p. 36-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

無助詞時間節構文の構文文法的考察

松浦 幸祐

1. はじめに

本稿は、日本語の複文のうち、(1) のような構文（以下、無助詞時間節構文と呼ぶ）に関する議論を行うものである。先行研究（益岡 1997 や日本語記述文法研究会 2008）では、例えば (1a) の「出かけようとしたとき」は、主節「電話のベルが鳴った」に対して時間状況を設定する意味を表すと記述されてきたが、その意味解釈が可能になる理由については、それほど十分な議論が行われていないと言える。本稿の目的は、上記の背景の中で先行研究に残されている問題点を解決するために、Croft (2001) が提案する 2 つの考え方、すなわち、カテゴリはそれが生起する構文全体を基に決まること、および、構文はネットワーク全体の一部として存在することを基に、無助詞時間節構文の新たな分析を提案することにある。

- (1) a. 出かけようとしたとき、電話のベルが鳴った。(益岡 1997 : 14)
b. 友達を待っているあいだこの本を読んでいたのだ。(益岡 1997 : 141)

本稿の構成は以下の通りである。まず、第 2 節では、先行研究による無助詞時間節構文の分析を整理し (2.1 節)、その上で、先行研究には 2 つの問題点が残されていることを確認する (2.2 節)。第 3 節では、理論的背景として、Shibatani (2019) による関係節構文の分析 (3.1 節) と、Croft (2001) による構文文法の考え方 (3.2 節) を概観する。第 4 節では、無助詞時間節構文が無助詞構文の下位構文として、ネットワークを成して存在しているという仮説を提案した上で、本稿による無助詞時間節構文の分析を示し (4.1 節)、それによって先行研究の問題点が解決できることを議論する (4.2 節)。第 5 節はまとめである。

2. 先行研究とその問題点

2.1. 先行研究

本節では、(2) から (6) のような、無助詞時間節構文に関する先行研究の分析を整理する。

- (2) 出かけようとしたとき、電話のベルが鳴った。(= (1a))
(3) 友達を待っているあいだこの本を読んでいたのだ。(= (1b))
(4) 由紀子に電話したあとこの手紙を書いた。(益岡 1997 : 141)
(5) ここに来るまえ、交番の前でたくさんの人が口論していた。(日本語記述文法研究会 2008 : 197)
(6) そうこうしているうち、帰る時間になった。(日本語記述文法研究会 2008 : 188)

先行研究では、例えば (2) の「出かけようとしたとき」は、主節「電話のベルが鳴った」を副詞的に修飾していると解釈できることから、「連用節」や「副詞節」の一種であると分析および記述されてきた。先行研究における連用節や副詞節の定義は (7) の通りである。ただし、以下では用語の混乱を避けるため、益岡 (1997) の用語である「連用節」を用いる。また、以下では、無助詞時間節構文の連用節部分 ((2) で言えば「出かけようとしたとき」の部分) を、特に「無助詞時間節」と呼ぶ。

- (7) a. 「連用節は述語や主節全体を修飾する節である。」(益岡 1997 : 13)
 b. 「連用節というのは、述語を拡張する節であり、」その多くは「述語を限定して拡張する¹ものである」(野田 2002 : 10)
 c. 「主節の述語を副詞的に修飾する節を副詞節という。」(日本語記述文法研究会 2008 : 6)

また、無助詞時間節が持つ形式的・意味的特徴についても (8) のようにまとめておく。まず、(8a) について、無助詞時間節は、連体節と時間を表す名詞 (N_{TIME}) から構成されるという形式的特徴を持つ (益岡 1997 : 139 など)。続いて、(8b) の意味的特徴について、無助詞時間節が行う副詞的修飾とは、具体的には、主節の事態に対する特定の時間状況の設定であるとされる (益岡 1997 : 144 など)。なお、(8a) の「 ϕ 」は助詞が生じないことを表す。したがって、例えば (8c) の「お風呂に入ったあと」が無助詞時間節であると分析できるのは、それが、連体節「お風呂に入った」と時間を表す名詞「あと」から成る形式を持ち、かつ、意味としては、主節「歯を磨いた」に対して、「入浴後の時点」という時間状況を設定していると解釈できるからである。

- (8) a. [[連体節] [N_{TIME}]] ϕ
 b. 主節を副詞的に修飾する。具体的には、主節に対して特定の時間状況を設定する。
 c. [お風呂に入った]_{連体節} [あと]_{N_{TIME}} ϕ 歯を磨いた。(作例)

2.2. 先行研究の問題点

先行研究による以上の分析は、日本語の複文研究では一般的なものであると言え、問題がないようにも思える。しかし、本節では、先行研究による分析に2つの問題点が残されていることを見ていく。

1つ目の問題点は、無助詞時間節と共通の形式を持つ他の構文との関連が十分に示されていない点である。2.1 節でも述べたように、無助詞時間節は、[[連体節] [N_{TIME}]] の形式を持つ。これと共通の形式であるが異なる意味を持つ構文として、(9a) の下線部のようなものがある。比較のために、無助詞時間節構文の例を (9b) に示す。(9a) の下線部には、(9b) と

共通の形式「運転しているあいだ」が用いられているが、その意味は(9b)と異なり、主節「全て記録されています」の時間状況を設定しているとは解釈されない。日本語記述文法研究会(2008)の記述を基にすれば、(9a)の下線部の意味は、「運転中の時点」のような、特定の時点を指示するものであると考えられる(日本語記述文法研究会 2008: 73)。したがって、(9a)の下線部は(7)や(8b)に当てはまらないことから、連用節やその一種である無助詞時間節ではないと分析される²。しかし、そのように分析する場合、(9a)と(9b)の意味的個別性は十分に考慮されているものの、(9a)と(9b)の形式的共通性はそれほど十分に考慮されていないという問題点があるとも考えられる。

- (9) a. 運転しているあいだの映像は、全て記録されています。
b. 運転しているあいだ、映像は全て記録されています。(いずれも作例)

また、(9)の下線部について、別々の構文ではありながらも、(10)のように「連続的」(前田 2009: 17)であると説明する研究もある。しかし、(10)の説明を行う場合、今度は、なぜ「運転しているあいだ」は(9b)のような時間状況設定の意味を表せるのかという問いに説明を与える必要が生じる。この問いは、次の段落で述べる2つ目の問題点として述べ直す。

- (10) a. (9a)の下線部のような表現は、(9b)の下線部のように、「主節の事態の時間を表す従属節を形成することもできる」。(日本語記述文法研究会 2008: 74)
b. 「形式名詞を修飾する補足節は、副詞節(例えば時間関係を表す節など)[...]として機能するものもある」(前田 2009: 16—17)

2つ目の問題点は、(10)に関して言及したように、無助詞時間節が主節を副詞的に修飾できる理由が説明できない点である。例えば、(11)の「佐藤さんが来たとき」は、主節「会場の片付けは終わっていた」が生じる時間状況を設定していると解釈できることを根拠に、無助詞時間節であると分析されるのであった。

- (11) 佐藤さんが来たとき、会場の片付けは終わっていた。(作例)

しかし、このように分析する場合、「佐藤さんが来たとき」が「会場の片付けは終わっていた」を副詞的に修飾できる理由に説明が与えられていないだけでなく、(7)の規定の下では、その問い自体が意味を成さなくなっているとも思われる。なぜなら、先行研究では、(7)を満たす単位、すなわち、主節を副詞的に修飾する節を「連用節」やその一種である「無助詞時間節」と呼ぶため、無助詞時間節が主節を副詞的に修飾することは、定義上、所与のこととされてしまっているからである。

以上2つの問題点を解決するためには、無助詞時間節が時間状況設定の意味を表せる理由や理論的動機付けの説明が可能な形で、かつ、(9)に見られるような意味的個別性と形式的共通性の双方を記述できる形で分析を行うことが必要であると言える。次節では、そのような分析のための理論的背景を述べる。

3. 理論的背景

本節では、Shibatani (2019) と Croft (2001) による議論を概観する。まず、3.1 節では Shibatani (2019) の議論を取り上げ、構文が特定の意味解釈を表す動機付けの説明（具体的には、関係節構文が修飾機能を表す動機付けの説明）が可能な形での分析について、その概要を見る。続いて、3.2 節では、構文における部分要素と構文全体との関係、および構文間の関係について、Croft (2001) で提案されている考え方を確認する。

3.1 Shibatani (2019) による関係節構文の分析

まずは、Shibatani (2019) による関係節 (relative clause) の議論³を見ていく。Shibatani によれば、伝統的な分析 (Comrie and Thompson 2007 や Dixon 2010 など) において、関係節は、それと同一の形式で表される傾向がある節の名詞化 (clausal nominalization) とは、独立した異なる構文であると分析されてきた。例えば、ボリビア・ケチュア語の例 (12) では、括弧部分に共通の形式 [*Maria-q wayk'u-sqa-n*] が用いられているが、(12a) では後続する名詞 *wallpa* を修飾する機能があると解釈されるのに対して、(12b) ではそのようには解釈されず、むしろ「マリアが料理したもの」という対象物を指示する機能を持つと解釈される。この意味の違いを根拠に、(12a) の括弧部分は関係節であるが (12b) の括弧部分は節の名詞化である (関係節ではない) と分析されるわけである。

- (12) a. [*Maria-q wayk'u-sqa-n wallpa*]-*ta mik'u-sayku*
 Maria-GEN cook-O.NMLZR-3SG chicken-ACC eat-PROG.1PL.EXCL
 ‘We are eating the chicken that Maria cooked.’
- b. [*Maria-q wayk'u-sqa-n*]-*ta mik'u-sayku*
 Maria-GEN cook-O.NMLZR-3SG-ACC eat-PROG.1PL.EXCL
 ‘We are eating what Maria cooked.’ (Shibatani 2019 : 56 グロス等は原文による)

しかし、Shibatani によれば、上記の分析では、(12a) と (12b) で同一の形式が用いられていることが無視されてしまうだけでなく、(12a) において括弧部分が名詞を修飾できる理由が与えられていないという問題が生じるとされる (Shibatani 2019: 81)。

この問題点に対して、Shibatani は、(12a) と (12b) に見られる機能の差は、同一の構文⁴が異なる用法で用いられたために生じる結果的な解釈の差であるという分析を提案してい

[illegible]

(12) a. [[*Maria-q wayk u-sqa-n*]_{NMLZ} [*wallpa*]_N]_{NP} 他の名詞との並置 — 名詞の修飾
 b. [[*Maria-q wayk u-sqa-n*]_{NMLZ}]_{NP} 名詞句の主要部 — 対象物の指示

– 40 –

- (14) a. 言語の基本単位は構文である。構文の部分要素のカテゴリや意味は、それが生起する構文全体を基に派生するものであり、その構文に固有である (Croft 2001: 46)。
 b. 構文は、スキーマと事例の関係に基づくネットワークを成して存在する。ネットワーク内では、上位の構文が下位の構文の特徴を部分的に指定する (Croft 2001:25)。

まず、(14a) について説明する。Croft によれば、従来の言語理論では、(14a) と反対の方略、すなわち、「形容詞」や「動詞」、「主語」や「述語」などのカテゴリを基本的な構築単位として規定し、それらを組み合わせることで構文が形成されるモデル (Croft 2020 では “building block model” と呼ばれる) が採用されてきたという。つまり、従来のモデルでは、例えば英語の形容詞述語構文は、主語 (SBJ)、*be*、形容詞 (ADJ) という基本的な構築単位が組み合わされることで、[SBJ *be* ADJ] という構文全体が規定されると考えるわけである。

しかし、Croft は、このモデルが持つ重大な問題点として、次の論理上の問題点を指摘する。例えば、構文の構築単位である形容詞や動詞というカテゴリを規定しようとする場合、(15a) や (15b) の構文がテストとして用いられる。そして、(16) や (17) の結果を基に、*be* とともに用いられるかどうか、時制 (TNS) と人称 (PERS) に関して屈折するかどうかといった、振る舞いや分布の違いを基に、基本的構築単位である形容詞や動詞が規定される (Croft 2001 : 12—13)。

(15) a. [SBJ *be* ____]

b. [SBJ ____ -TNS.PERS]

(16) a. Jack **is** cold.

b. *Jack colds.

(17) a. *Jack **is** dance.

b. Jack dances.

(いずれも Croft 2001:12 太字等は原文による)

上記のモデルに対して Croft が指摘する問題点とは、このモデルでは、動詞や形容詞といった基本的構築単位を組み合わせることで (15a) や (15b) の構文を規定するという前提に立ちながらも、実際には、その構築単位を規定するために (15a) や (15b) の構文が根拠として使われており、議論に循環が生じている点である (Croft 2001 : 45)。

そのため、Croft (2001) では、「動詞」や「形容詞」などの基本的単位が構文を形成するという従来の前提を捨て、反対に、(15a) や (15b) の構文全体こそが言語の基本的単位であり、その中に生じる部分的要素 (すなわち (15) の SBJ、*be*、ADJ など) のカテゴリは、(15a) や (15b) の構文全体を基にして、その構文に固有のカテゴリとして存在すると考える。そして、このように考える場合、異なる構文に生じるカテゴリは、各々の生じる構文全体を基にその特徴が決まる以上、それぞれに異なる特徴を持つことも予想される。実際に、(15b) の下線部に生じる「動詞」カテゴリは、例えば [SBJ ____ -TNS.PERS OBJ] の構文に生じる「動詞」カ

テゴリとは異なる特徴を持つカテゴリ（すなわち、一般的な用語⁷ではそれぞれ「自動詞」と「他動詞」）である（Croft 2001 : 53—55）。

つづいて、(14b) と図1を基に、Croft (2001) における構文間関係について確認しておこう。図1は、イディオム的な構文 *kick the bucket*（死ぬ）を (14b) のネットワークの形で表示したものである。図1の表示を行う利点の1つは、*kick the bucket* 構文（図1の<a>）の有する個性だけでなく、他の構文との共通性も同時に記述できることにあると考えられる。

まず、*kick the bucket* 構文は、「死ぬ」という慣習化した意味を持つ点で、の *kick* 構文や<c>の他動詞構文とは独立した個別の構文であると言える。したがって、図1では、<a>の構文は、や<c>の構文とは独立したノードとして表示されている。しかし、それと同時に、*kick the bucket* 構文は、の *kick* 構文や<c>の他動詞構文と共通の項構造（<a>で言えば、主語 Ktb1 と目的語 *the bucket*）を持つため、や<c>の構文の具体的な事例であるとも言える。図3の<a><c>間の実線は、このようなスキーマと事例の関係を表すものである。

さらに、ここまで「構文の部分要素」と呼んできた要素についても、スキーマと事例の関係が形成されると考えられる。なぜなら、構文の部分要素も形式と意味の組み合わせである以上、構文であると言えるからである。例えば<a>の構文の目的語 *the bucket* は、の構文の目的語 Kick2（すなわち、動詞 *kick* が取る目的語）や、<c>の構文の目的語 TrObj（すなわち、他動詞が取る目的語）がより具体化した事例であると考えられる。図1の点線は、そのような、構文の部分要素の間で結ばれるスキーマと事例の関係を表すものである。

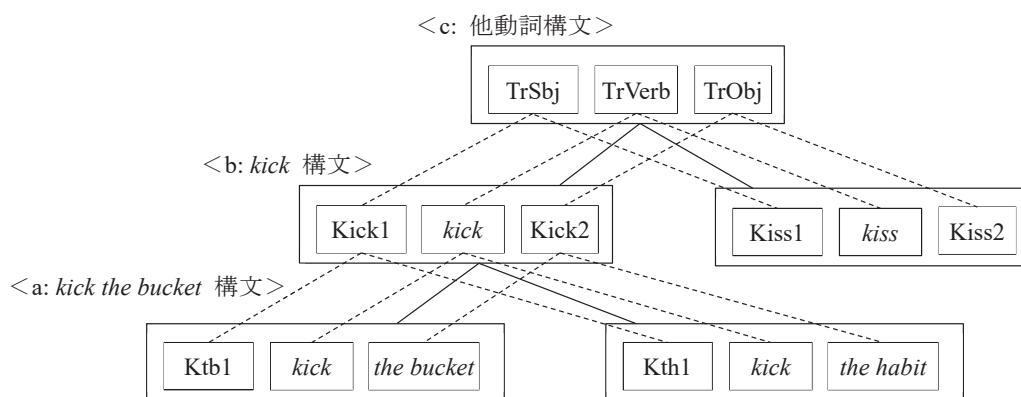


図1 : *kick the bucket* を含む構文のネットワーク (Croft 2001 : 56 より一部抜粋)

最後に、第3節の内容を整理するために、(14) を用いて (12) の例を分析し、Shibatani (2019) と Croft (2001) の共通点について簡単にまとめておく。Shibatani による (12) の分析と Croft による (14) の構文モデルを基に考えると、ボリビア・ケチュア語の例 (12) は、図2のネットワークを成して存在していると考えられる。

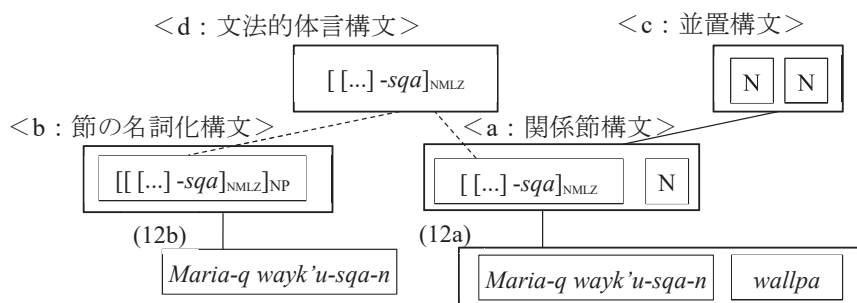


図 2：ポリビア・ケチュア語における関係節構文の局所的なネットワーク
(構文の部分要素間の関係表示は一部を除いて省略した)

まず、(14a) を基に考えると、<a>の関係節構文に生じる $[[...] -sqa]$ という部分要素は、<a>の構文全体があつてはじめて、その機能（すなわち、名詞の修飾）が決定される。同様に、の節の名詞化構文に生じる $[[...] -sqa]$ の機能（すなわち、対象物の指示）も、の構文中でのみ与えられる解釈である。これは、Shibatani (2019) で言えば、 $[Maria-q\ wayk'u-sqa-n]$ が<a>のように他の名詞と並置されて（修飾用法で）用いられれば修飾の機能を果たし、のように名詞句の主要部として（名詞句用法で）用いられれば対象物を指示する機能を果たすことに対応すると言える。そして、Shibatani (2019) では、<a>の関係節構文における修飾機能は、語彙的な名詞の並置と同様の機能であると分析していたが、これは、Croft の (14b) を基に考えると、<a>の関係節構文が<c>の並置構文の事例であるという関係が想定されていると言える。したがって、図 4 では、<a>と<c>は実線で結ばれている。さらに、<a>の構文との構文に共通する部分である $[[...] -sqa]_{NMLZ}$ の構文には、その上位に、具体的な機能（名詞の修飾や対象物の指示）が捨象された、<d>の抽象的な構文があると考えられる。もちろん、<d>の構文は、Shibatani (2019) における文法的体言に相当する。

4. 提案と考察

本節では、前節で述べた理論的背景の下で、無助詞時間節構文の新たな分析を提案し、考察を行う。具体的には、まず 4.1 節で、無助詞時間節構文は無助詞構文の下位構文としてネットワークを成して存在するという仮説を提案し、本稿による無助詞時間節構文の分析を示す。続く 4.2 節では、本稿の分析によって先行研究の問題点が解決できることを示す。

4.1. 提案

ここまでの議論を踏まえ、本稿は、(18) の仮説を提案する。

- (18) 無助詞時間節構文は、無助詞構文の事例として、構文間のネットワークの中で存在している。

この仮説の詳細を説明する前に、まずは、無助詞構文について簡潔に述べておく。無助詞構文とは、(19) のような例に代表される構文であり、(20a) の形式と (20b) (20c) の意味を持つ（長谷川 1993、黒崎 2003、丹羽 2006、山泉 2013、Yamaizumi 2011, 2018、松浦 2020 など）。例えば (19a) は、(20a) のように、「私」という無助詞名詞句 (NP) と、「知ってます」という主節 (CLAUSE) から成る形式を持ち、意味としては、(20b) のように、「私」という主題を設定した上で、その主題について「知ってます」と述べる文である。さらに、(19c) のような、無助詞名詞句「昨日話してた旅行」と主節「花子は 10 月まで仕事で忙しいみたいだよ」との間に格関係を想定できない例があることから分かるように、無助詞構文の成立は、無助詞名詞句と主節との格関係ではなく、(20c) の構文的意味によると考えられる⁸。

- (19) a. 私 ϕ 知ってます。（丹羽 2014 : 602 「 ϕ 」は原文による）
b. くつべら使う？（山泉 2013 : 449）
c. 昨日話してた旅行、花子は 10 月まで仕事で忙しいみたいだよ。（松浦 2020 : 112）
(20) a. [[NP] ϕ [CLAUSE]]
b. 名詞句を主題として設定し、主節でそれについて述べたり尋ねたりする
c. 名詞句と主節とは語用論的に関連付けられる

なお、(21) のように、助詞の無い名詞句が主題の意味を表していないものは、助詞省略構文と呼ばれ、無助詞構文とは区別される（荻宿 2014 など）。例えば (21) では、文全体が情報の焦点となっており、「犬」と「いる」の間に主題と解説の意味関係があるとは言えない。したがって、(21) は無助詞構文ではなく助詞省略構文であると分析される⁹。

- (21) 【授業中にふと外を見て、校庭に犬を見つけたときの発話】
あ、犬 ϕ いる！（作例）

以上を踏まえ、(18) の仮説を基に、無助詞時間節構文が形成するネットワークを示すと、図3が得られる。以下、図3を用いて、本稿における無助詞時間節構文の分析を示す。なお、図3では、スペースの都合上、無助詞時間節構文の例として、無助詞時間節の末尾に「とき」を用いる構文（図3の<a：無助詞とき節構文>）のみが表示されている¹⁰。

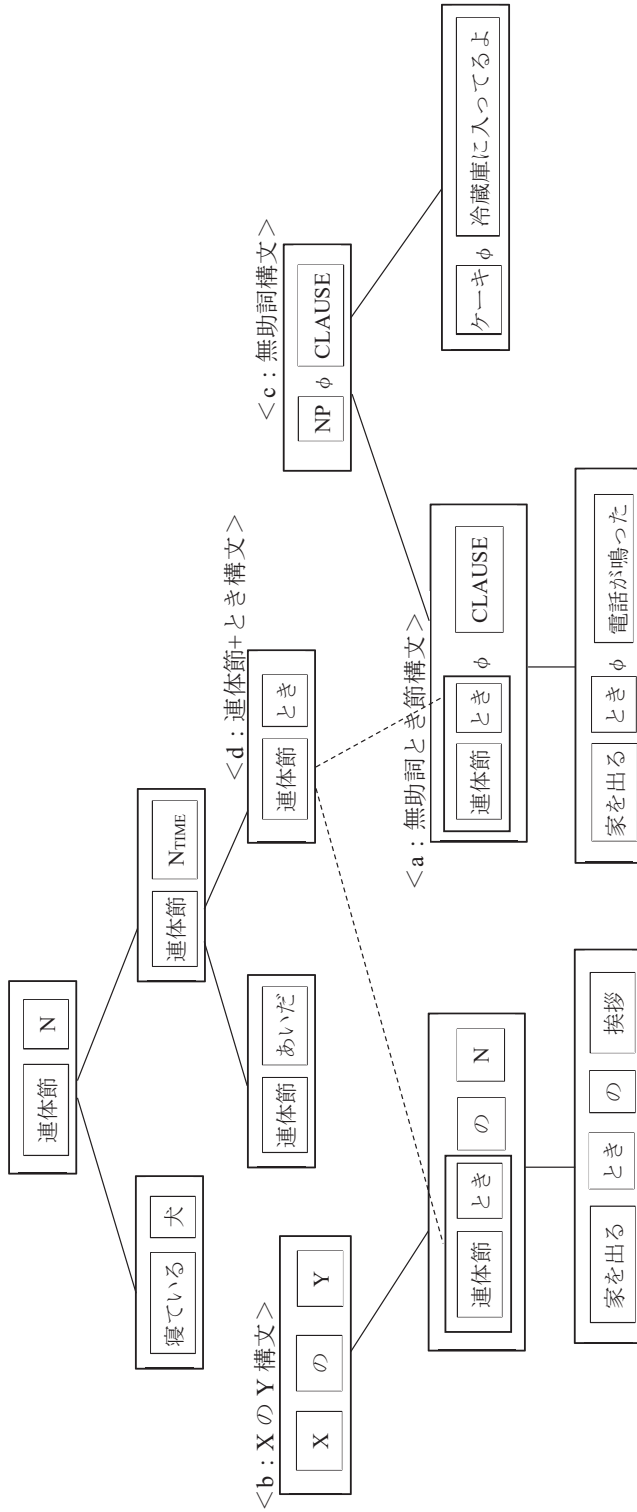


図3：無助詞時間節構文の局所的ネットワーク
(構文の部分要素間の関係表示は一部を除いて省略した)

まず、＜a＞の構文、例えば (22a) において、無助詞時間節「家を出るとき」が主節に対して時間状況を設定するという意味は、3.2 節の (14a) を基にすると、＜a＞の構文全体から与えられた、＜a＞の構文に固有の意味であると考えられる。したがって、「家を出るとき」という同一の形式であっても、それが＜a＞以外の構文に生じている場合には、異なった意味を持つことが予想される。実際に、「家を出るとき」は、例えば (22b) のように、＜b＞の「X の Y 構文」の X に生じている際には、2.2 節の (10) で日本語記述文法研究会（2008）の記述を基に述べたように、特定の時点（「家を出る時点」など）を指示する意味が解釈されていると言える。

- (22) a. 家を出るとき、電話が鳴った。
b. 家を出る時の挨拶（いずれも作例）

つづいて、そもそも無助詞時間節が時間状況の設定という意味を持つ理由を、3.2 節の (14b) を基に説明していく。1 つ前の段落で確認した通り、「家を出るとき」という表現は、＜a＞の構文の部分要素である場合、＜a＞の構文に固有の意味として、主節に対する時間状況の設定という意味を持つ。本稿では、(18) の仮説で述べたように、＜a＞の無助詞時間節構文が持つこの構文的意味は、上位構文である＜c＞の無助詞構文から部分的に指定されたものであると考える。言い換えれば、(23a) のような無助詞時間節構文における時間状況の設定という意味は、(23b) のような無助詞構文が持つ主題の設定という意味（4.1 節で見た (20b) の意味）から拡張した意味だと考えるわけである。したがって、この部分的指定関係を表示するために、図3の右半分では、＜c＞の構文と＜a＞の構文とが、スキーマと事例の関係で結ばれている。

- (23) a. 家を出るとき、電話が鳴った。（＝ (22a) ）
b. ケーキ、冷蔵庫に入ってるよ。（作例）

さらに、図3のネットワーク関係を想定することで、＜c＞から＜a＞へと意味拡張が生じる理由も自然に説明することができるようになる。(20c) で述べた通り、無助詞構文には、構文的意味として、無助詞名詞句と主節とを語用論的に関連づけるという意味がある。したがって、無助詞構文の無助詞名詞句の部分に時間を表す名詞句（例えば「家を出るとき」）が生じた場合、主節（例えば「電話が鳴った」）との語用論的な関連づけとして、時間状況とそこで生じる事態という意味関係が解釈されることは、ごく自然であると思われる。

無助詞時間節構文の意味の実現に語用論的関連づけが関わっていると考えたことの妥当性は、無助詞時間節構文と無助詞構文の間で文脈による解釈の曖昧性が観察されることによっても示される。例えば、(24) の下線部は、通常、「集中する時に（BGM は）あった方が

いい」という無助詞時間節構文の意味に解釈されるであろう。この場合、(24) では、「何かに集中するとき」という時間状況が設定され、その状況と「(BGM は) あった方がいい」という事態との副詞的修飾関係が表されていると言える。

(24) A: 「川のせせらぎ」みたいな BGM ってたまに売ってるけど、あれってどういう人が買うんだろうね？ 日常生活の中で使い所がない気がするんだけど....。

B: いやいや、何かに集中するとき、あった方がいいよ！ (作例)

しかし、(24) の下線部を異なる文脈に置いた (24') では、下線部自体の形式は同一であるにもかかわらず、異なった解釈が可能になる。(24') の下線部で意図されている意味は、「何かに集中する時間帯に関して言えば、(それは) あった方がいい」とでも言い換え可能なものである。この場合、(24') の「何かに集中するとき」は、主節事態が生じる時間状況というよりも、むしろ、無助詞構文の構文的意义 (20b) で示されていたような、主節に対する主題と解釈されていると言えよう。したがって、(24B) や (24'B) の下線部が図3の<a>の無助詞時間節構文として解釈されるか、<c>の無助詞構文として解釈されるかは、「何かに集中するとき」と主節とが語用論的にどのような関連付けを受けているかによって決まると言える¹¹。

(24') A: 結局さ、人間、常にリラックスしてた方がいいと思うんだ。何かに集中するなんて、疲れちゃうじゃん？

B: ええっ、そうかな？ 何かに集中するとき、あった方がいいよ！ (作例)

4.2 考察

本節では、本稿による無助詞時間節構文の新たな分析によって、2.1 節で見た先行研究の2つの問題点が解決できることを述べる。まず、先行研究に残されていた1つ目の問題点は、無助詞時間節構文と同一の形式を持つ他の構文との関係、すなわち、(9a) の下線部のような構文との関係が十分に説明されていないというものであった。

- (9) a. 運転しているあいだの映像は、全て記録されています。
- b. 運転しているあいだ、映像は全て記録されています。(以上再掲)
- c. 運転しているあいだ

本稿の分析では、(9a) と (9b) が持つ個別性と共通性の双方に理論的説明を与えることが可能になる。まず、それぞれの下線部が持つ個別性、すなわち、(9a) の下線部は特定の時点を示す意味を持つが、(9b) の下線部は主節事態の時間状況を設定する意味を持つ理由に

については、3.2 節の (14a) で述べたように、それぞれの例で「運転しているあいだ」が異なる構文に現れている以上、異なる部分要素の構文として規定されているからだと説明できる。換言すれば、(10a) の「運転しているあいだ」と (10b) の「運転しているあいだ」の関係は、それぞれ異なる構文全体に規定される異なる部分的構文であるということである。

しかし、それと同時に、(9a) と (9b) の部分要素「運転しているあいだ」の共通性に関して、本稿では、この2つの構文の上位の構文に、(9c) の抽象的な構文を想定する(図3で言えば<d>に相当する)。この構文は、形式としては (9a) と (9b) の下線部と共通するが、意味としては「運転中の時間」のような概念を表すだけで、それを時点として指示したり、状況として設定したりする機能が指定されていない点で、(9a) と (9b) の下線部よりもスキーマ的な構文である。繰り返しになるが、この抽象的な構文 (9c) に時点指示の意味解釈を指定するのは (9a) の X の Y 構文という構文全体であり、時間状況設定の意味解釈を指定するのは (9b) の無助詞構文という構文全体である。

続いて、2.2 節で確認した2つ目の問題点は、無助詞時間節が主節に時間状況を設定できる理由が説明できない点であった。これに対して、本稿では、(18) で述べたように、無助詞時間節構文は無助詞構文とスキーマ・事例の関係(図3で言えば、<a>と<c>の実線で結ばれる関係)を成して、ネットワークの一部として存在していると提案した。そして、3.2 節の (14b) で述べた通り、構文間のネットワークにおいては、スキーマ的な上位の構文が、その事例である下位の構文の特徴を部分的に指定するのであった。したがって、例えば (25a) のような無助詞時間節構文が時間状況設定の意味を持つのは、その上位構文である (25b) のような無助詞構文が持つ、主題の設定という意味が部分的に指定されているからであると説明が可能になる。

- (25) a. お風呂に入っているとき、インターホンが鳴った。
b. ゴミ、出しておきましたよ。(いずれも作例)

5. おわりに

以上、本稿では、無助詞時間節構文の新たな分析を提案し、それによって、先行研究に残されていた2つの問題点が解決できることを示した。具体的には、無助詞時間節構文は無助詞構文の下位構文としてネットワークの中で存在すると分析することで、形式的に共通する他の構文との関係が明らかになるとともに、無助詞時間節と主節との間の意味関係が成り立つ理由に理論的説明を与えることも可能になった。

本稿の分析が含意することとして、「ときに／あいだに／あとで」や「ときは／あいだは／あとは」のような、助詞を伴う時間節構文(仮に有助詞時間節構文と呼ぶ)は、無助詞時間節構文とは別系統のネットワークを形成している可能性が考えられる。具体的には、無助詞時間節構文が無助詞構文の下位構文として存在しているのと同様に、(26a) のような「に」

を伴う有助詞時間節構文は (26b) のような「に」を伴う構文の下位構文として存在し、また、(27a) のような「は」を伴う有助詞時間節構文は (27b) のような「は」を伴う構文の下位構文として存在していることが予想できる。これらの予想が妥当と言えるかどうか、特に、助詞の有無や種類から構文的特徴の個性・共通性が統一的に説明できるかどうかについては、今後の課題としたい¹²。

(26) a. 仕事へ行くまえにゴミを出しておいた。

b. 床に財布が落ちている。(いずれも作例)

(27) a. 1年以上海外に滞在するときは、市役所へ届出が必要です。

b. 河合さんは、甘いものが大好きです。(いずれも作例)

参考文献

- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』, ひつじ書房。
- 荻宿紀子 (2014) 「「無助詞」研究の現状と課題」早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究 (人文科学・社会科学編)』62 : 147-162.
- 黒崎佐仁子 (2003) 「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2 : 77-93.
- 郡史郎 (1992) 「プロソディーの自律性——フレージングを定める規則について」『言語』第8号 : 31-37.
- 郡史郎 (2008) 「東京方言におけるアクセントの実現度と意味的限定」『音声研究』第12巻第1号 : 34-53.
- 田村幸誠 (2021) 「中央アラスカ・ユピック語からみた体言化理論」鄭聖汝・柴谷方良編『体言化理論と言語分析』: 353-397, 大阪大学出版会。
- 寺村秀夫 (1992) 「時間的限定の意味と文法的機能」『寺村秀夫論文集I』: 127-156, くろしお出版。(初出: 渡辺実編 1983. 『副用語の研究』, 明治書院.)
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6 第11部 複文』, くろしお出版。
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』, 和泉書院。
- 丹羽哲也 (2014) 「無助詞」日本語文法学会編『日本語文法事典』: 602-603, 大修館書店。
- 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則編『日本語の文法 4 複文と談話』: 3-61, 岩波書店。
- 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80 : 158-168.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』, くろしお出版。
- 松浦幸祐 (2020) 「無助詞構文の構文文法的考察」『日本語・日本文化研究』30 : 106-120.
- 山泉実 (2013) 「左方転位構文と名詞句の文中での意味的・情報構造的機能」西山佑司編『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』: 431-457, ひつじ書房。
- Comrie, Bernard and Thompson, Sandra A. (1985/2007) “Lexical nominalization,” *Language*

- Typology and Syntactic Description, Vol. 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, edited by Timothy Shopen, 334–381, Cambridge University Press.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. New York: Oxford University Press. (ウィリアム・クロフト『ラディカル構文文法』, 山梨正明(監訳)・渋谷良方(訳), 研究社, 2018.)
- Croft, William (2020) *Ten Lectures on Construction Grammar and Typology* (Distinguished Lectures in Cognitive Linguistics). Leiden: Brill.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory volume 2: Grammatical Topics*, Oxford University Press.
- Shibatani, Masayoshi (2019) “What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization,” *Nominalization in Languages of the Americas*, edited by Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani, and David W. Fleck, 15–169, John Benjamins, Amsterdam.
- Yamaizumi, Minoru (2011) “Left-Dislocation in Japanese and Information Structure Theory.” *NINJAL Research Papers 1*, 77–92.
- Yamaizumi, Minoru (2018) “Reconsidering the Layered Structure of the Clause in Japanese: Focusing on the NP-wa and Left-dislocation.” 大阪大学言語社会学会『EX ORIENTE 25』, 47–89.

-
- ¹ 一般的な用語では、おおよそ「連用修飾する」の意味に相当すると思われる。
- ² 実際に、日本語記述文法研究会(2008)による記述でも、(9a)のような構文は「名詞修飾節」の章で、(9b)のような構文は「時間節(連用節の下位類)」の章で、それぞれ別立てで扱われている。
- ³ Shibatani の理論の理解に際しては、田村(2021)も参考にした。
- ⁴ Shibatani (2019) では、“structure”の用語が用いられている。
- ⁵ Shibatani (2019) では“lexical nominalization”(語彙的体言化)と呼ばれる。
- ⁶ ここまでの議論からも予想されるように、Shibatani (2019) では、(12a)などの分析に際して、「関係節」という独立した文法カテゴリが必要になるだけでなく、そもそも(12a)の括弧部分は「節」ではない(文法的体言である)と分析されるため、「関係節」という名称は不適切であるとも述べられている(Shibatani 2019: 87–88)。本稿では理解のしやすさを優先し、以下でもひとまず「関係節」の名称を用いる。
- ⁷ Croft (2001) では、カテゴリはそれが生起する構文に固有であると考え、各カテゴリが持つ名称(例えば「自動詞」や「他動詞」)は、あくまで構文固有のカテゴリに付けられたラベルに過ぎないとされる。
- ⁸ 詳しい議論は松浦(2020)を参照されたい。
- ⁹ 無助詞構文と助詞省略構文の形式的区別については、管見の限り、加藤(2003)、丹羽(2006)、山泉(2013)を除いてあまり議論がないものの、郡(1992, 2008)による議論を基に考えると、後続節のイントネーションによる区別が可能であるように思われる。これについては、時間節構文における焦点構造の有無と格助詞の有無に対応関係があると指摘する益岡(1997)との関連も含めて、稿を改めて考察したい。
- ¹⁰ (14a)でも述べたように、本稿では、構文の部分要素はあくまでそれが生起する構文全体に固有であるという前提に立つ。したがって、<c>の「CLAUSE」と<a>の「CLAUSE」のように同名のラベルが与えられているカテゴリであっても、異なる構文に生起している以上、厳密にはそれぞれ異なったカテゴリであることが想定されている。
- ¹¹ 誤解のないように述べておくと、ここでは、無助詞時間節構文を個別の構文として認める必要がないと主張しているわけでない。ここでの議論は、無助詞時間節構文と無助詞構文がそれぞれ個別の構文としてネットワークの中に存在していることが前提となっている。
- ¹² この予想を支持すると考えられる研究として、寺村(1992)では、「とき／ときに／ときは」の意味について、各表現が持つ周辺の意味に重なりは見られるものの、各表現の典型的な意味は異なっていること、特に「ときに」と「ときは」の意味の違いは、取り立て助詞(係助詞)と格助詞の意味の違いに対応することが述べられている(寺村 1992 : 154)。